

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第6章 預言者における祈り⑦



エゼキエル

預言者エゼキエルは、神との欠けの無い交わりの中に歩んでいました。しかし、他の大預言書の預言者に比べると、彼の祈りと神との対話はさほど多く記録されてはいません。エゼキエルが預言者としての務めへの召命を受けたのは、神の裁きが近いことを予期させるような幻の中でのことでした。「その方は私に仰せられた。『人の子よ。立ち上がれ。わたしがあなたに語るから。』その方は私に仰せられた。「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの民、すなわち、わたしにそむいた反逆の国民に遣わす。彼らも、その先祖たちも、わたしにそむいた。今日もそうである』」（エゼキエル 2:1,3）。



祈りの人はたいがい、模範となるような他の敬虔な人々に刺激され、祈りについての独特な習慣を発展させるものです。「神である主」というエゼキエルの呼びかけは、おそらくアブラハム(創 15:2 を参照)、モーセ(申命 3:24)、ヨシュア(ヨシュア 7:7)、ギデオン(士師 6:22)、ダビデ(IIサムエル 7:18-20,28-29)、ソロモン(I列王 8:53)、エレミヤ(エレミヤ 32:17)たちの例に刺激を受けてのことでしょう。疑うまでもなく、この表現は(他の翻訳では「エホバなる神」とありますが)、エゼキエルの信仰の炎を燃え立たせるとともに、彼が近づき、願いを捧げていた偉大な神を知覚できるようにさせるものとなったことでしょう。

そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。私はかつて、自分を汚したことはありません。幼い時から今まで、死んだ獣や、野獣に裂き殺されたものを食べたことはありません。また、いけにえとして汚れている肉を口にすることもありません。」(エゼキエル書 4:14)

主はエゼキエルについて、来たるべきエルサレムの陥落とイスラエルの隷属を象徴として示すために彼が何をすべきかを既に描いておられました。彼は自分のパンを人糞で調理しなければなりません。というのも、ユダヤ人たちは異邦人の土地で汚されることになるからでした。この点についての、神に対するエゼキエルの応答は、ペテロのもの(使徒 10:10-14 を参照)とよく似ています。ペテロもまた、神が禁じておられたもので自分を汚すことのないよう気を揉んでいました。優れた魂というのはなんと、どんな手段によっても汚れを避けようとするものなのでしょうか。良き人々にとっては、罪によって魂が汚されることこそ何より悲惨なことなのです。しかし、過度に敏感な良心というのは、とりたてて原因なしに恐れを抱くときがあります。エゼキエルはまだ、人を汚すものは口から入るものではなく口から出るものだということ(マタイ 15:11 を参照)を学んでいませんでした。ところが、今日の世界は、冒涇や汚れにつながるどんなものをも誠実に避けようとする純粋な良心からは、かけ離れたものとなってしまっているのです。

エゼキエル書は後に、エゼキエルが人々のためにいかに熱心に祈ったかを記録しています。他の人々のために重荷を担う人は時として、祈っている自分が気にかけているほどには神が人々を気にかけておられないかのように感じることもあるかもしれません。しかし、私たちの同情は、神の憐れみを超えることは決してできません。神こそ、他の人々のために祈るという重荷を与えてくださる方だからです。

彼ら(筆者注：御使いたち)が(筆者注：忌むべきことを行なっていた人々を)打ち殺しているとき、私は残っていて、ひれ伏し、叫んで言った。「ああ、神、主よ。あなたはエルサレムの上にあなたの憤りを注ぎ出して、イスラエルの残りの者たちを、ことごとく滅ぼされるのでしょうか。」(エゼキエル書 9:8)

ひれ伏すという行為は、聖書を通じて、切迫した絶望的な状況でのとりなしの姿を描くものとなっていますが、それでも、人がどれほど差し迫った必要を感じていようが、神の憐れみはそれよりもさらに大きいのです(エゼキエル 18:23,32 を参照)。

18:23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。

18:32 わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ——だから、悔い改めて、生きよ。

エルサレムに裁きの時が近づくにつれ、エゼキエルは、それが完全な破壊に至ると感じていました。「神は人々を、倒れるような試練の状況、破滅的ともなり得る状況に置かれる。しかし、その目的は、破滅ではなく大勝利なのである」。神はまさに、イスラエルの国の敬虔な残りの民を保ち、守るおつもりでした。エルサレム陥落とバビロン捕囚は、イスラエルから偶像礼拝を駆逐し、来たるべきイエス・キリストの地上での働きへと道備えをするために必要なものだったのです。もしもイスラエル人が(エレミヤ 3:13、エゼキエル 6:13 にあるように)国中で偶像礼拝を続けていたなら、イエスが山上の垂訓をお教えることは、ほとんどできなかったことでしょう。

神のメッセージをその民に携えて行くということは、必ずしも華やかなことではありません。神は時として、ご自分の使者に裁きを宣言するという厄介な務めをお与えになります。そのような務めは、当該の預言者にとって重いものです。裁きの雷の声として立つ時でさえ、預言者の憐れみの心は張り裂けるのです。

こうして、私が預言しているとき、ベナヤの子ペラテヤが死んだ。そこで、私はひれ伏し、大声で叫んで

言った。「ああ、神、主よ。あなたはイスラエルの残りの者たちを、ことごとく滅ぼされるのでしょうか。」(エゼキエル書 11:13)

神はエゼキエルに、ヤアザヌアとペラテヤに対して預言をするように命じておられました(エゼキエル 11:2-4を参照)。注解者の中には、エゼキエルは、アナニヤとサツピラの事例におけるペテロのように、ペラテヤに裁きを宣言したのではないか、それで彼は突然にして死んだのではないかと示唆する人たちがいます。もしそれが本当ならば、私たちはここに、誰であれ全能なる方によって用いられる人々に与えられた深遠な教訓を得ています。神からいただいている権威の行使により、その深刻な裁きをもたらすために用いられる人々です。そこには、他人の失敗を喜ぶ余地はなく、ただ悲しみがあるだけです。同じ裁きが他の人々には及ばないようにとの祈りがあるだけです。

神の使者が負うもう一つの重荷は、聞く人々がそのメッセージを常に真剣に受け止めてくれるわけではないということです。 実に、神のしもべが全能なる方に委ねられたメッセージそのものを語る時には、聞く人々は悔い改め、その指示を受け取るべきです。しかし、実際には逆のことが起こるのがほとんどです。使者は嘲られ、迫害され、拒絶されるのです。人々は、その預言者が主の言葉を正しく聞き、宣言しているのかという疑問を、たやすく抱いてしまうものだからです。「そこで、私は叫んだ。『ああ、神、主よ。彼らは私について、「彼はたとえ話をくり返している者ではないか」と言っています』」(エゼキエル 20:49)。

ここに、神のしもべでありながら、話を真面目なこととして真剣に聞いてもらえないという憂き目に遭う全ての人のための教訓があります。エゼキエルは真理ではなく作り話を語っていたのだと示唆することは、誤解しようのないその強い裁きの言葉を拒むための利己的な方便に過ぎませんでした。

人々が神ご自身を拒むのであれば、神が油を注がれた使者が時として同じ扱いを受けることも不思議ではありません。

? 質問

- 1 エゼキエルが好んだ「神である主」という呼びかけは、過去の敬虔な人々から刺激を受けたものでした。あなたの祈りの中で、聖書に記されている聖徒たちや教会におられる信仰の先輩から教えられたものや受け継いだと思われるものがありますか？
- 2 エゼキエルとペテロはどんな点で似ていると言われて 있습니까？
両者が似ている点はあなたとも共通していると思いませんか？

- 3 他の人々のために重荷を担う人は時として、どんなことを感じることもありえますか？ 私たちの同情と神の憐れみはどちらが豊かですか？ 神の憐れみの方が豊かだったとしたら、神は祈る私たちにどんな態度でどんなことをして下さると思いますか？
- 4 神のメッセージを携えて行く人は、どんな重荷を負うことになりますか？ あなたも神のメッセージを携えていく一人として、どんな務めを果たすべきであり、どんな心を持ち、どんな祈りをするべきでしょうか。
- 5 神の使者が負う重荷にどんなことがありますか？ あなたは神の使者としてどんなメッセージを語っていますか？ そのメッセージを聞いてもらえなかったときに、エゼキエルを見習うとどんな態度をとったらよいと思いますか？
- 6 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

天の父なる神さま。何か奉仕をすれば必ず良い結果に結びつくとは限らないことを学ばせてください。むしろあなたの喜びを喜びとし、あなたの悲しみを悲しみとすることができるように成長させて下さい。